

35

2019・June

●Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

諸外国の絵本を介し、 異文化を知る喜びを

●「絵本翻訳コンクール」開催10周年に向けて

—国内未翻訳の絵本を課題にした高校生を対象とするコンクール—

人々の意識を変える方法を考え、 皆が生きやすい社会を目指す — 5

社会問題の解決に向けた認知心理学的アプローチ
人間科学部 心理・行動科学科 矢野 円郁 准教授

ことばを学び／教えて、世界とつながる — 9

—海外で日本語を教える—
独立行政法人国際交流基金 日本語指導助手 松本 絵美 さん

●初舞台を踏んだ“ぶりん亭芽りん”

英語落語を世界平和の架け橋に — 11

—お笑いのエネルギーを世界へ—

●一人ひとりの特性や個性と向き合う

学習支援教室におけるボランティア活動で

「国内ボランティア奨励賞」を受賞！ — 12

●副専攻プログラムで音楽を学ぶ学生たち

専門の学び×芸術表現《歌う・弾く》の相乗効果 — 13

●音楽学科舞踊専攻卒業生によるウクライナ公演

日本を飛び出し、世界へ — 15

学生主催の文学部講演会を開催 — 16

●高岡ゼミと株式会社米寿の産学協同研究

国産茶葉「べにふうき」を使ったオリジナル和紅茶を開発 — 17

KC インフォメーション — 19

Susan E. JONES



■英語本来の楽しさを知り、異文化に触れる体験を

改めて、絵本翻訳コンクール実施の目的や意義についてお聞かせください。
中村先生 開催の目的は2つあり、一つは、高校生に受験英語ではない英語本来の楽しさを知ってもらいたいこと。もう一つは、絵本を通じて異文化に触れる喜びを味わってもらいたいことです。国際理解を深めるリベラルアーツ教育を重要な柱としています。

課題絵本はどのように選定するのですか？

ジョーンズ先生 まだ日本語に翻訳されていないもの、訳したときに違いが現れそうなものを選出します。擬音語などのオノマトピアがたくさん入っていたり、深い意味が込められていたりする作品を積極的に選んでいます。

中村 英語の絵本であることが条件ですが、異文化に触れてもらう目的もあるので、英語圏外のドイツやインド、

フィリピン、シンガポールなどの物語を取り入れてきた経緯があります。

応募状況はいかがですか？

中村 開催当初は800程だった応募数が、今では1800程にまで増え、第9回までの総応募数は1万1000程にも及びました。全国的に広く認知されてきたことは一定の成果であり、スタッフは対応に追われて嬉しい悲鳴を上げています。

審査のポイントは何ですか？

中村 自然な日本語になっているか、作品の持つ世界観と合っているかなどを重視しています。

奥村先生 私は英語ネイティブの視点から、単語のニュアンスまで理解し、作者の創作意図をきちんと汲み取れているかなどを見ています。

ジョーンズ 翻訳者のクリエイティブティも大切です。送られてきた1800程もの翻訳は全て違います。

第9回の課題絵本『The King and the Seal』の『Say YIKES or OUCH』

or THINGAMEBOBの訳し方が面白かったです。

中村 リズムで表現すると、タンタンタンタンタンタタン。最優秀賞作品は秀逸で、これを『おどろきものきさん』の『き』と翻訳しました。絵本は読み聞かせることもあるため、リズムやテンポを掴むことが大切。意味よりもリズムを優先したことは、正にクリエイティブティの発露です。

審査にあたり、気になることは？

ジョーンズ 翻訳に一番大切なのは、読者の立場を考慮すること。安易な英文和訳、自分のパートをただ訳しただけで書き方がバラバラな共作を見ると、残念な気持ちになります。

奥村 実際の絵本の世界観を無視し、自分の世界観が強い作品も気になります。例えば、場面はアフリカの市場なのに、関西のおばちゃんが喋るような方言を入れてくる。とても面白いと思う反面、そこまで他の要素を取り入れるのはどうなのかと考えさせられます。

中村 『The King and the Seal』はミニマリストな絵本で、背景もシンプルでしたが、原作よりも寂しい内容に訳

NAKAMURA Masahiro



す人がいて、少し心配になりました。また第8回の課題絵本『WHEN DAD SHOWED ME THE UNIVERSE』では、登場する父親と息子の会話から翻訳者の親子関係が垣間見えました。私達は、顔は見えないものの、作品を通して1800人程の高校生と向き合っている、コミュニケーションを取っているため、面白くもあり苦しくもあります。

■英文和訳と翻訳の違いを学ぶ場を

中村先生は毎年、夏休みに高校生を対象とした翻訳体験講座を開催されていますね。

中村 はい。絵本は文章量が圧倒的に少なく、翻訳も余分な言葉をそぎ落とし、短い言葉でいかに豊かに伝えるかが問われます。非常に高度な技術が必要とされ、語尾の一つにも気を抜けない。受験英語とは全く異なるため、その違いを肌で感じてもらう内容となっています。高校生はもちろん、高等学校の先生方も参加し、同様の体験を純粋に楽しんでくださっていることは嬉しい限りです。

ジョーンズ 声に出して翻訳文を読み、

異文化を知る喜びを

—国内未翻訳の絵本を課題にした高校生を対象とするコンクール—

●文学部 英文学科

中村 昌弘 准教授

奥村 キャサリン 准教授

スーザン・ジョーンズ 専任講師

「諸外国の絵本を介し、

「絵本翻訳コンクール」開催10周年に向けて



リズムを確認するなど、講座でレクチャーされる技術は、調べても出てこない貴重な方法ばかり。アドバイスをきちんと反映して翻訳された作品は、読めばすぐに分かりますよ。

■言葉で伝える力を養う

—高校生から手応えを感じますか？

中村 以前は、荒削りな英文和訳もありましたが、最近では一朝一夕で出来るレベルではないもの、しっかり時間をかけて練り上げた作品の応募が目立つようになりました。受賞者によるスピーチからも、「翻訳する過程で自分の能力不足を認識した」「多くの気付きがあった」「もっと国語力や伝える力を高めたい」等、言葉が持つ力の大切さをきちんと理解していることが伝わってきて、嬉しいと同時に報われた感じがしています。

奥村 受賞は彼らの自信にも繋がっています。また、第8回、9回は同じ人が連続受賞し、その才能にも驚きました。ジョーンズ 高校生の翻訳に対する意識が高まってきている背景には、YouTubeやNetflix、Amazonプライムなどのストリーミング型メディアの増加も関係していると思います。実際に原文と翻訳文を見比べることはなくとも、日常的に接するメディアの中で、人による翻訳と自動翻訳の双方に触れ、その差がわかるようになってきたのではないのでしょうか。

—今後の展望をお聞かせください。

ジョーンズ 今年度は10周年を迎えるため、何か例年と異なる試みをしたと考えています。

中村 異文化は、究極的には二人の人間がいれば成立します。これまでとは違う形の異文化に触れてもらいたいですね。

奥村 翻訳で培ったスキルは、書き言葉に限らず話し言葉にも通用し、コミュニケーション能力のアップに繋がります。そのため、より多くの人に伝えることが今後の課題です。

中村 言葉を使って伝える力は人間にとって必要であり、翻訳はそれを養うトレーニングになります。意識して行えば、必ず血となり肉となる。そのことを、講座に参加できない人にも伝えていきたいですね。今は高等学校へ絵本と一緒に「翻訳の手引き」を送付していますが、よりよい方法はないか。受賞者以外の応募者にも何らかの形でアドバイスやコメントを返したいので、それも合わせて探っていきます。

Kathy OKUMURA



女学院は、高校生等を対象とした「第9回絵本翻訳コンクール」を実施し、昨年11月24日、めじらウヅにて表彰式を執り行った。本コンクールは、海外で出版され、まだ翻訳されていない絵本を日本語に翻訳するというもの。2010年の開催以来、毎年、高校生ならではの視点で翻訳されたオリジナリティ溢れる作品が多数寄せられており、昨年度はこれまでの参加校数を上回る全国360校から1738作品もの応募があった。10周年の節目を迎える今年度の開催の前に、審査員を務める中村昌弘准教授、奥村キャサリン准教授、Susan E. JONES 専任講師にコンクールの目的や意義、手応え等について話を聞いた。



◀「松岡享子さん」



私は女学院の卒業生ですが、卒業から年数が経過するほど愛校心が芽生え、母校の大切さを感じるようになっていました。そんなところに、「絵本翻訳コンクール」の審査員長を引き受けてもらえないかと依頼いただきました。私は何年も翻訳の仕事、特に子ども向けの絵本の翻訳を多く手がけていましたから、専門家として母校のお役に立てるよい機会だと感じ、快諾いたしました。

高校ではおそらく、文法や単語を覚え、それらを活用して意味だけを単純に捉えて英文を訳すことを教わる授業が多いかと思いますが、それに対してコンクールでは、課題となる絵本を1冊まるごと、物語の始めから終わりまで自分一人で、あるいは2、3名のグループでその翻訳に取り組みます。そして、単純に英語を訳すのではなく、その絵本の書かれた文化的・社会的な背景を理解するとともに、作者が絵本に込めた意図も想像しなくてはなりません。それは生徒たちにとって、大変有意義な経験になると思います。

コンクールに参加した生徒の皆さんは、

◀「真珠まりこさん」



コンクールの審査会では、作品を読むことで、これまで知らなかった海外の文化にふれたり、審査を担当する先生方から英語での深い読み解き方を教えていただいたり、応募された作品からみなさんの個性や努力の跡に出会うことができ、楽しく取り組みさせていただいています。

審査にあたり、英文学科の先生方から、翻訳は作者が伝えたいことをちゃんととらえているか、それを自分の言葉としてどんなふうに表現しているかなどの解説を伺ったあと、私自身は、日本語としてリズムがいいか、読みやすいかということを一歩のポイントとしてみています。流れるように日本語として心地よく読めるかは、大事なことだと思います。

そして、絵本作家としては、絵本のタイトルの訳し方も気になるポイントです。タイトルがよければ、たくさん並べられた本の中でも手にとってもらえますし、本文への興味を持ってもらえるのです。作品の内容を理解して、センスのよいタイトルがつけられているのを見えると、うれしくなります。絵本を翻訳するには、その作品が描かれ

英語に対する興味や意欲が高い方が多いかと思いますが、英語という手段を最終的な目的にするのではなく、英語を駆使して何か世の中のためになることを成し遂げていたきたいと思いますし、そのことはコンクールの表彰式等でもお伝えしてきました。今もそうですが、これからも日本には多くの外国人が入ってきています。そうした外国人とどのように一緒に暮らしていくか、あるいは共生していくかということが大きな問題になります。まさに異文化理解の問題です。ぜひ高校生の皆さんには、日本とは異なる文化で生きてきた人々と協調して生きていくことに目を開いてほしいです。



●「絵本翻訳コンクール」10周年
関わったメンバーに聞く

「英語を駆使して
世のために」



- 第1回～第5回の審査員長(翻訳家・絵本作家)
松岡 享子さん——MATSUOKA Kyoko
- 第6回からの審査員長(絵本作家)
真珠 まりこさん——SHINJU Mariko
- 第1回～第6回まで審査員(元 英文学科教授)
田辺 希久子さん——TANABE Kikuko
- 本学入学センター課長
長谷川 紹子さん——HASEGAWA Shoko

◀「田辺 希久子さん」



私が「通訳・翻訳プログラム」の翻訳分野の専任教員として着任した際、通訳分野は有名でしたが、翻訳分野の知名度はまだでした。そうしたこともあり、当時入

私「通訳・翻訳プログラム」の翻訳分野の専任教員として着任した際、通訳分野は有名でしたが、翻訳分野の知名度はまだでした。そうしたこともあり、当時入

「神戸女学院大学絵本翻訳コンクール」の最優秀賞受賞者には、原本と同じ装幀で受賞者の翻訳本が贈呈される。
◀写真は、受賞者に贈呈された2018年度の「The King and the Sea」の各受賞者の翻訳本。

2010年、第1回「神戸女学院大学絵本翻訳コンクール」では、全国の高等学校90校から851作品の応募があった。
▲写真は、第1回表彰式の様子。



◀「長谷川 紹子さん」



入学センター・広報室職員として高校生や関係者の方々と話をする中で、「神戸女学院大学という名前は知っているけれど、具

体的に何ができるのか分からない」という反応が年々強くなっていると感じていました。そこで、本学を高校生にPRする何か「神戸女学院と言えば○○」と言われるものがほしいと考えたことがきっかけとなり、コンクールの企画に至りました。

絵本の翻訳をテーマとした理由は、「英語」をキーワードとした場合、他の大学や団体等の主催で「スピーチコンテスト」は数多く行われていたが、「翻訳」を扱うコンクールは珍しかったからです。加えて、本学には当時既に「通訳・翻訳プログラム」が整備されており、翻訳を専門とする田辺希久子先生がいらつしました。これらから、本学ならではのものとして「絵本翻訳コンクール」を企画しました。

実現に向けては、構想段階から一緒に動いてくださった田辺先生をはじめ、松岡享子さんに審査員長を引き受けてくださるよう手紙を書いてくださった理事長・院長(当時)の松澤貝子先生やコンクールの内容についてご意見をくださった中高部の先生など、学院内に賛同者と協力者がいてくださったことで一歩一歩進むことができました。

印象に残っているのは、表彰式で受賞者に贈る副賞をオリジナル絵本にしたことです。「受賞者が訳した日本語による絵本」の制作にはハードルもありましたが、作者のご理解も得て、実現させることができました。完成品を見た際には、「これを受け取る高校生はどんなに喜ぶだろう」とワクワクしたことを覚えています。

先日、調べたいことがあり「絵本翻訳」でネット検索をしたところ、一番に本学のサイトがヒットしました。開始から10年が経ち私も担当を外れて久しいですが、このコンクール自体が大きく成長し定着していることを改めて実感し嬉しく思いました。

The King and the Pencil
"Talk to me," said the king to the pencil. "Say something!"
Say YIKES or OUCH or THINGAMABOB."
The pencil said with a nod, "I'm bltge."



人々の意識を変える方法を考え、皆が生きやすい社会を目指す

● 社会問題の解決に向けた認知心理学的アプローチ

● 人間科学部 心理・行動科学科

矢野 円郁 准教授 — YANO Madoka



男女の不平等をなくすにはどうしたらいいのか？
冤罪をなくすには？ 事故を引き起こす前に危険な行動を止められるようにするには？
私達を取り巻くあらゆる社会問題を解決するには、人々の意識改革が必要となってくる。「現状を全て肯定するのではなく、まず疑問を持つことが大切です」。人間の思考や記憶のくせ、判断のバイアスなどに関する認知心理学的研究の知見を踏まえ、問題の根本がどこにあるのかを見極め、原因を解明し、改善していくための方法を模索する矢野円郁先生に話を聞いた。

■ 認知心理学的な知見を踏まえ、社会問題に取り組む

「専門の認知心理学とは？」

社会心理学や臨床心理学など、様々な心理学の基礎となる学問で、記憶や注意、思考など、人の認知機能の仕組みを研究します。

私はもともと社会問題に関心があり、冤罪に興味を持ったことから認知心理学の道へ進みました。なぜ冤罪が起こるのかを解明するためには人間の記憶の仕組みを知る必要があります、その知識を得た上で、どのように社会を変えられるのか考えたかったのです。

「冤罪の研究から見えてきたことは？」

人の記憶は過去の経験や知識に基づいて変容するものであり、思っているよりも不正確だということが分かりました。目撃者の確信の強さと目撃記憶の正確さには関連がない、あってもごく弱いことを示した研究報告は数多くあり、目撃者がどんなに確信をもって証言している内容でも、それだけでは証拠として十分ではありません。

日本でも裁判員制度が開始され、一般人も刑事裁判に参加して被告人を裁く立場に置かれる可能性が出てきました。私の役割は、記憶の曖昧さをデータに基づいて学生に伝え、講演会等を通して社会にも発信していくこと。記憶の変容を皆が認知し、証言の信憑性を確かめられる記録を残していけば、冤罪を生む可能性を減らすことが出来

るかもしれません。最近、子どもの記憶確信の正確さに関する研究をした大学院のゼミ生もあり、その成果も役立つのではと期待しています。

■ 男女を区別しない環境を育む

現在はジェンダー意識の研究をされていると伺いました。きっかけは？

きっかけは、私自身の出産です。夫婦ふたりの時は、夫の家事分担率が低くてもそんなに不都合はありませんでした。が、子どもができると分担しな

くては仕事が出来ません。世間では、母親が家事育児をやるのは当たり前。父親は頼まれたり指示されたりして手伝い、やると「ありがとう」と言われる風潮があります。この構造を変えなければ、女性……そして、恐らく男性も生き難い。自分自身が親業と職業を両立するためにも、まずジェンダー問題に取り組まなければならない、というところですね。

「どのような研究を？」

3歳になる我が子を通して、人間の

ジェンダー意識はいつ頃から芽生えるのかを会話や実験課題で調べています。実験では、息子の成長に応じて、大きさの異なる3つの靴のイラストを印刷したカードを見せ、誰のものか尋ねます。うちは3人家族で、大きい靴はお父ちゃんの、中くらいの靴は私（お母ちゃん）の、小さい靴は息子のもの。これは2歳の時点できちんと認識していました。では色を着けるとどうなるでしょう？ 大きい靴を青、中くらいの靴をピンクにすれば即答しやすいですが、大きい靴をピンクにすると、大ききで判断するのか、色に引く張られるのか？ 答える際に一瞬逡巡する様子など、微妙な差異も見えています。3歳の時点では、大きいピンクの靴を「お母ちゃんの」と言うことはほぼありませんでしたが、うちは夫もピンクのシャツを着ることがあるし、「男の子だから、女の子だから」と言わないようにしているからかもしれません。

日本では、男の子にはブルー系、女の子にはピンク系という色分けをすることが一般的で、保育園等でも男の子には青いラベル、女の子には赤いラベルが貼られることが多いと思います。男の子がいわゆる可愛い服装をしていると、大人から悪気なく「今日は女の子みたいね」と言われることもあります。5歳前後で「ピンクは女の子の色だから着ない」と言うようになる話もよく耳にするため、いずれは複数の子どもを対象に調査していく予定です。



子どものジェンダーステレオタイプの実験の様子

「環境によって、徐々に男女を分ける意識が生じてくると？」

さらに小学校へ上がると、算数は男の子の方が、家庭科は女の子の方が得意という雰囲気が出てきます。ですが、プロの料理人には男性が多いことから明らかなように、それは違いますよね。教育現場では先生方も様々な研修を受け、非常に忙しいことは周知の通りですが、ジェンダーに関しては不勉強な先生がいることもまた事実です。そもそも家庭科が男女共修になったこと自体それほど昔の話ではなく、教育者の多くは自身も「男女には生得的に違いがあつて当たり前」として育ってきています。学校は「男女平等の教育を」と機会均等を与える立場にありながら、男女差別を生み出す機関になってしまっており、なかなか変わりにくい状況だと感じています。



■矢野円都 (やの・まどか)
博士 (心理学)。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。中京大学心理学部助教、名古屋女子大学文学部講師を経て、2013年より神戸女学院大学に着任。日本交通心理学会国際交流委員会・委員、同家庭部会・委員、JAF兵庫支部交通安全実行委員会常任委員。専門は認知心理学。研究テーマは、記憶、メタ認知、リスク認知、交通安全教育、ジェンダー、貧困。著書に『時間記憶の認知心理学—記憶における経過時間とその主観的感覚—』(ナカニシヤ出版 2010)、共著に『認知心理学ハンドブック』(有斐閣ブックス 2013)、『誤解の理解 対話115例で解説するコミュニケーション論』(あいり出版 2009) など。

これは学生にも言っているのですが、「男の子は青、女の子は赤」などの当たり前とされていることを疑って欲しいのです。男女格差が少ないスウェーデンではトイレすら区別していないそうです。なるべく幼少期から区別しない環境を作ることによって、区別しないことが「当たり前」となり、違いを意識することが減ると考えられます。意識的に変える努力をしなければ、「当たり前」

り前」は変えられないでしょう。
■**児童の認知発達に即した教育で、自転車事故を未然に防ぐ**

そのほか、昨年8月には尼崎市で開催された『自転車のまちづくりフォーラム』で講演するなど、交通事故防止のための活動もされていますね。
交通安全教育への取り組みは、応用心理学分野の助教をしていた際に上司



小学校で行った交通安全実習の様子

だった教授が携わっており、私も関わるようになりました。自転車の運転は免許を要せず、正しい乗り方を学習する機会もほとんどありません。大人になってから乗り方のくせを直すのは難しく、事故防止には子どものうちから学校教育の中で安全な乗り方を習慣づけることが重要です。そこで認知心理学分野からのアプローチとして、自転車が自動車の運転手からはどう見えるのか等、他者視点を取得して危険の認識を高める実習を行ったり、そうしたカリキュラムを学校教育に取り入れていくための構造を検討したりしています。

—— 今後の展望をお聞かせください。
小さな事では、息子に妻を困らせない男、自分のおしりを自分で拭ける人間に育てたいです。女性自身が、女性を生き難くさせる人間を作るといふ悪循環に歯止めをかけたい。そして、女子教育にあたる立場としては、女子達をもっと「自信をもって」「ステレオタイプに縛られず」「自由に」生きていけるよう励ましていきたいです。「仕事はしたいけれど、家事育児との両立は自分には無理だ」というから専業主婦になりたい」という学生がいます。それについても、家事育児分担率の男女平等化を進めなければならず、それにはやはり「区別しないこと」「当たり前を疑うこと」が大切です。最近脳科学によるジェンダー研究も進み、男女の脳は違うため、特性も異なるという意見も見られます。けれど、環境に応じて脳も変化するもので、相関が見られたとしても直接的な因果関係は言えません。違うから仕方ないで済ませるのではなく、どのようにジェンダー意識が作られていくのかメカニズム的なレベルで研究を進め、皆が生きやすい社会にするために、どのようなアプローチで意識を変えていけばよいのか、データを踏まえて提案していきたいと思っています。

—— それで、論文『小学校教諭におけるジェンダー意識と教科学習能力の性差に対する認識の関係—ジェンダー・ステレオタイプの再生産防止のために—』を発表されたのですね。どのようなことが分かりましたか？
この研究では、小学校の先生がどのようなジェンダー観を持って子ども達に接しているのか、各教科の能力に対して性差を感じているのかを調査しました。その結果、小学校の先生は、一般人よりは性別の特性を信じてはいないものの、未だに強く信じている人も少なくないことが分かりました。相関分析においては、性別特性観が強い先生ほど、教科の能力に対する性差を大きく認識していました。一方で、同じ生徒を観察していても、性別特性観が弱い先生は、すべての教科に対して男女で違いがないと回答しています。つまり、性差があると信じる人には性差が「見え」「信じていない人には「見えない」。少しでも性差があると思うと、人は無意識にそれを実現する方向に働きかけ、自己成就してしまいます。そのため、教育者はステレオタイプのジェンダー観を持たないことが必要と言えます。

—— ジェンダー・ステレオタイプを持たないために、気をつけるべきことは？
大切なのは、極力、性別カテゴリーを使用しないことです。身体測定などは男女で分けることも必要でしょうけれど、実は、殆どことは区別しなくても困らないのではないのでしょうか。



■松本絵美(まつもと・えみ)
2015年文学部総合文化学科卒業。同年7月から、2018年8月まで、国際協力機構から、日系社会青年ボランティアとして、ブラジルのサン・ミゲル・アルカンジョ市に属する日系人の移住地コロニア・ピニャールのコロニア・ピニャール日本語モデル校に派遣される。2019年4月から、国際交流基金の日本語指導助手として、インド・チェンナイに駐在中。



日本人ブラジル移民100周年を記念して建てられた鳥居

との話し合いの中でヒントを見つけ、親、祖父母の世代の思いとすり合わせながら授業を作っていくのが、私が見つけた授業のやり方でした」
やがて、高学年の子どもの中には、「日本語を通して、私は日系人なんだと感じられるし、ブラジルで生きるおじいちゃんたちを誇りに思う。いつも教えてくれてありがとうね」と、松本さんに打ち明ける子も現れた。
「ブラジルでは、お前は日本人だ」と言われる。日本に行けばブラジル人だと言われる。私は一体、何人？と思う日系の子はたくさんいます。日本語を学ぶことで、ブラジル人だけでなく日本人の心も持っている日系人。だという、アイデンティティを育むことにながっていくんじゃないかと思うんです」と、松本さんは日系社会における日本語教育の意義に思いを巡らせた。

◎**原点は中国人社宅の日本語教室**
そもそも、松本さんはなぜ、日本語教員の道を選んだのだろうか？
「家の前に、中国から来た労働者の住む社宅があって、6歳の頃、そこに住む友達を訪ねて遊びに行くと、みんなが集まって、日本語の先生から授業を受けていたんです。習っていたのは『トランプ』と『パス』という言葉の違い。なぜ、こんな勉強を？って思ったのが、言葉に興味を持つきっかけでした」
高校では国際文化学科を選択。大学院では、主専攻は現代思想を、副専攻で日本語教師養成課程と、全学の副専攻プログラムであるキャリアデザインプログラムのメディア・コミュニケーションを履修。また、プロジェクト科目の「中国で体験する異文化」では、提携校である広東外語外贸学院の現地

学生と交流し日本語授業を見学、「フィールドで学ぶ現代インドの諸問題」では、インド・ベンガルルで、日系企業を見学したり、貧困地域に生きる子どもたちと交流した。
「興味のあるものを複数の視点から学べるこの大学だからこそ、専門分野の話がとてもおもしろく感じられました。楽しい学生生活でした」と振り返る。こうして語学への関心を深め、海外への経験を重ねてきたが、卒業後の進路として日本語教員の道をまっすぐ選んだわけではなかった。就職活動では周りに流されるように、民間企業を回った。そんなとき、目についたのが、海外ボランティアを募集するJICAの電車の吊り広告だった。
「好きな日本語教育の世界に飛び込むなら今しかない。このチャンス逃したら、この先ないんじゃないか。この



道で生きてみたいと思ったんです」
◎**子どもの少し先を歩く存在に**
コロナ・ピニャールで教えている間、ずっと心がけていたことがあった。「目の前にいる子どもたちの、少し未来を歩くお姉さんであろうと思っていました」
その言葉のようなロールモデルとなれたかどうかは、松本さんにもわからない。ただ、「世界に渡って働く人がいる。語学をおもしろいと感じて仕事をしている人がいる、と興味を持ってもらうだけでも意味のあることだったのではないかと」と彼女は考えている。
学校を離れるときに子どもたちから渡された、ある手紙には「迷わず歩み続けたのは、あなたが最大に光ってくれたから」と記されていた。
現在、松本さんは、国際交流基金の日本語指導助手としてインド・チェンナイで働いている。今回は学習者を直接教えるのではなく、現地のインド人日本語教員の能力アップや支援が主な仕事。派遣期間は2021年4月までの2年間。「好奇心のままに動いていた過去の私が巡り巡って、今の自分へ帰ってきている気がします。私がこの場にいられる環境や運、恩師や友人、そして、家族の恩恵に感謝して、どんな場所でも健やかに生きていきたい」と話す彼女はインドでキャリアをしっかりと積んで、一つ上の日本語教員に成長して帰ってくることだろう。



◎**ブラジル日系社会で日本語教育**
ブラジル・サンパウロの南西約120キロに位置するコロニア・ピニャールは、戦後、日系移民によって開拓された村。この村に、松本絵美さんがやってきたのは、2015年7月。その年の3月に総合文化学科を卒業したばかりのことだった。それから3年間、彼女は国際協力機構(JICA)の日系社会青年海外協力隊員として活動した。それは、村の日本語学校「コロニア・ピニャール日本語モデル校」で、6歳から17歳の日系の子どもたちを教える教員としての日々だった。

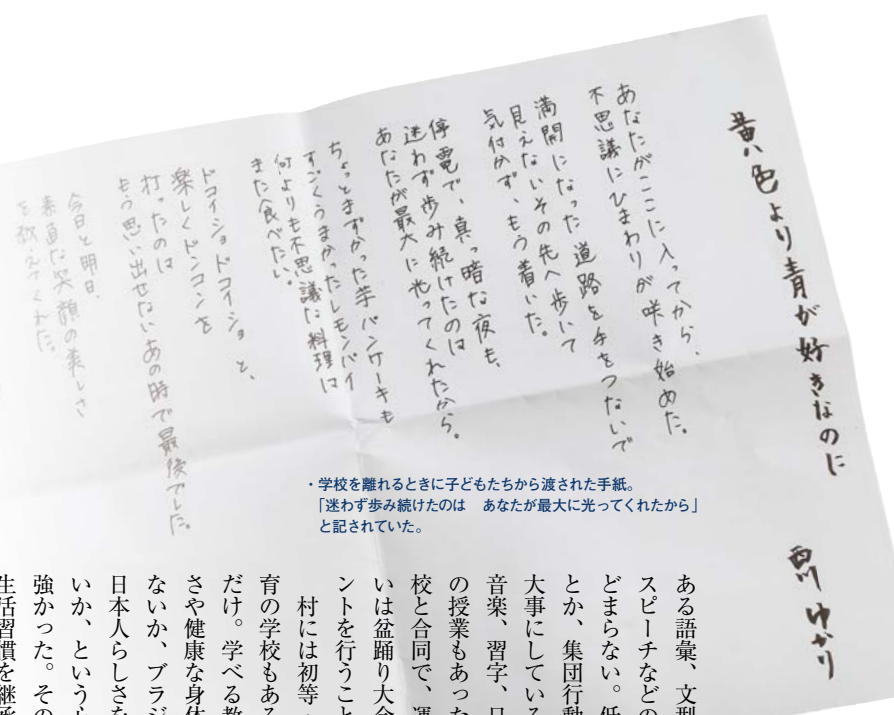
◎**日本文化に対する世代ごとの思い**
初めての一人暮らし、慣れない生活環境、教師としての経験不足、多岐にわたる授業内容……、課題は多く、当初はうまくできたという成功体験が得られず、松本さんは日本語教員としての自信を持つことがなかなかできなかった。
「2年目、やっと子供たちの、楽しい」という声が聞こえてきた。子どもたちが何を求めているのか、何で困っているかを問いかね、そのレスポンスを授業の中で返すようにしました。子ども

ことばを学び／教えて、世界とつながる

—海外で日本語を教える—

●独立行政法人国際交流基金 日本語指導助手
松本 絵美 さん—— MATSUMOTO Emi

子供の頃から語学に関心を持ち、日本語教員養成課程を修了した松本絵美さんが、卒業後に向かったのは、ブラジル。スーパーも銀行もレストランもない小さな日系の村で、日本語学校の先生になった。日系社会の課題に向き合いながら、日本語教員として成長した3年。そして、今、彼女は、日本語教員としての新しい職場を得て、インドに渡っている。



・学校を離れるときに子どもたちから渡された手紙。
「迷わず歩み続けたのは あなたが最大に光ってくれたから」と記されていた。

ある語彙、文型、読解、漢字や作文、スピーチなどの、日本語授業だけにとどまらない。低学年では、靴を揃えるとか、集団行動のルールを守ることも大事にしている。他にも、図画工作、音楽、習字、日本料理の調理実習などの授業もあった。また、他の日本語学校と合同で、運動会や林間学校、あるいは盆踊り大会、ひな祭りなど、イベントを行うことも多かった。
村には初等・中等教育を行う義務教育の学校もある。しかし、授業は半日だけ。学べる教科も限られ、心の豊かさや健康な身体を育むには不十分ではないか、ブラジルに完全に同化して、日本人らしさを失ってしまうのではないか、という心配が、特に移民一世に強かった。そのために、日本の文化や生活習慣を継承してほしいという、地域の強い思いによって、日本語学校は設立され、維持されてきた。

VOLUNTEER



●文学部 総合文化学科4年生
小島 さん
(学年は取材当時)

◎学習支援教室におけるボランティア活動で「国内ボランティア奨励賞」を受賞！

●一人ひとりの特性や個別性と向き合う

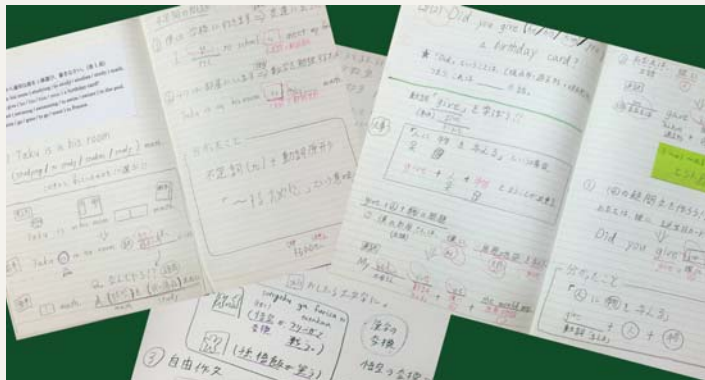
知的・発達障害のある子ども達を対象とする神戸市の学習支援教室に、3年前からボランティアとして参加している小島さん。現在、教室には小学生から高校生まで10人の生徒が通っており、週1回、学習専任スタッフによる1対1の個別指導が実施されている。試行錯誤を繰り返しながら、一人ひとりの学習進度に合わせて勉強を教えている小島さんに、活動から学んだことや今後の抱負など、話を聞いた。

〈国内ボランティア奨励賞とは〉
2016年度に神戸女学院大学のボランティアサポート委員会により創設された賞。国内でのボランティア活動に貢献した学生を対象としている。

——活動に参加したきっかけは？
1年生の後期に、ゼミの先輩から学生生活について話を聞く授業がありました。発達障害のある子どもの家庭教師をしたことで学びを得たという話が心に残り、私も学習支援のボランティアをしたいと思い、学内掲示板を見たり説明会に参加したりして探したのですが、見つからなくて……。そんな時、母の知り合いからこの教室を紹介されました。

——もともと社会福祉に興味を持っていたのですか？
入学した時は専門的に学ぶなんて思っていませんでした。でも、ある授業で西宮市の障害当事者団体の代表からお話を聞く機会があり、気持ちを揺さぶられました。その方は、自分が事故で車椅子生活になったことや周りの障害者の方達の言動を面白くおもしろく話してくださったんです。皆、笑っているのか葛藤していたのですが、最後に「障害者の話は真剣に聞くべきという概念があつて気を使ってくれたと思うけど、笑っていいし、自分分は面白いことも話したい」と仰って。すごいなと思い、その時に社会福祉のゼミに入ることに、精神保健福祉士の養成課程を取ることを決めました。

——ボランティア活動をしてよかったことは？
最初は「支援しないとい



けない」という印象があつたのですが、実際は生徒から吸収することの方が多かったです。また、私は精神保健福祉士の視点で活動していますが、周りの先生方は教職や臨床心理系の視点をお持ちです。様々な角度からの考え方を知ることができ、先生方との出会いも貴重な財産になりました。

——どのような学びを得ましたか？
最初は、生徒の気分の波や課題が終わらないこと等を、私の力不足と捉えていたのですが、「そういう状態もある」と学びました。そこから、言い方を変えたり、少しずつ問題を渡したりと、一人ひとりのその日の状態を踏ま

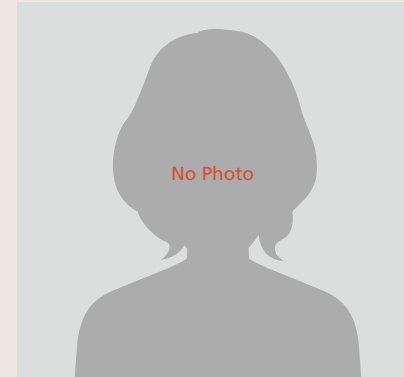
えて、個性のある関わり方が出来るようになりました。

また、大学の授業で「傾聴」の大切さを教わったのですが、傾聴ばかりしていると生徒の勉強が進みません。大切な話はしっかり聞き、切るべきところは切る。まだまだ見極めが難しいですが、少しずつわかるようになってきました。

あと、私は生徒に対して「この位まではできるはず」という思いから、至っていない部分ばかりに目を向けてしまふのですが、他の先生方の指導法を見ることが、褒めて伸ばしたり、楽しく勉強できるよう工夫したりすることも学びました。例えば、ローマ字を習っているドラゴンボール好きの生徒には、キャラクター名をローマ字で書き、パズルにして渡しました。すごく喜んでくれて嬉しかったです。

——今後の抱負をお聞かせください。
就職が決まり、4月からは大手企業の特例子会社で働きます。授業で「ノーマライゼーション」「インクルーシブ教育」等、障害者との共生社会について学びましたが、現実とはそんなに甘くないことも実感しています。障害者を雇用しても利益は出さねばならず、重度の方を受け入れるのは厳しいこともわかっていきます。けれど、私は障害の程度によって無理だと決めつけたくない。違う方法を探り、何かを変えることで、その固定観念を覆すことができればと思っています。

PERFORMANCE



英語落語を世界平和の架け橋に—お笑いのエネルギーを世界へ—

●初舞台を踏んだ“ぷりん亭芽りん”

「最初は15人程だったお客様が、次々に足を止めてくださり40人程に。凄く嬉しくて、この道で頑張るきっかけになりました」。小学校3年生の時、伊丹市主催のストリート落語で初舞台を踏んだ“ぷりん亭芽りん”こと藤波さん。

「りりん」という韻の響きが可愛い。芽が出るように」と六代 桂文枝師匠から芸名をいただき、早10年。その活躍から目が離せない。



●英語落語家
文学部 英文学科1年生
藤波 さん (学年は取材当時)

■ぷりん亭芽りん(ぷりんてい・めりん)
2009年より英語落語の活動始める。2010～2016年 日本初の英語ミュージカル団体「Youth theater Japan」のメインキャストとして数々の舞台に出演。2012～2015年 松竹芸能に所属。現在はフリーランスとして英語落語団体「おふく寄席」で活動するほか、朗読劇、スピーチ、MC、テレビ、ラジオ等、幅広く活躍。マイムラボ11期生。ホリエモン万博2018【E-1グランプリ〜英語でいちばん面白いやつは誰だ〜】優勝、第九回てんしき杯全国学生落語王者決定戦第三位など、受賞多数。

ため。女学院出身の友達やオープンキャンパスで話した学生が、自分の大学に誇りを持ち、目的を持って勉強に励んでいる姿にも惹かれた。「私も女学院で勉強漬けになって成長したい！」。その言葉通り、授業のある日は遅くまで残って勉強し、休日は舞台や稽古に全力を注ぐ。「落語はお客様とのコミュニケーション。少人数制の授業が多いぶん、ディスカッションの機会も多く、舞台での表現にとっても役立っています」。

●世界中の人が楽しめる落語を
現在、芽りんさんは活動の場を海外へも拡げており、昨年は英語落語団体のEUツアーに招聘され、ロンドンとローマで公演した。国内外の違いを尋ねると、「日本では、年配の方にも興味を持っていただけるよう、英語に対するハードルを下げるのが課題」という。試行錯誤の末、誕生したのが冒頭の多重放送。日本語を挟むことで緩急



海外で英語落語を披露するぷりん亭芽りんさん(ローマ公演)

や笑いにも繋がり、好評だ。「現在、特許申請中です(笑)」。

一方、海外では落語のストーリーやシステムの説明に重点を置く。「座って観るコメディ」の文化がないため、最初、お客様は引き気味です。上下を付けることも知らないため、ハロー！と台詞を言う、客席からハロー！と返ってくることも笑。でも、少しずつ理解していただくうちに、だんだん前のめりになって漸く聞き、笑ってくれる。初舞台で見た景色と重なって感動します」。

今後は、英語落語を世界に広めながら、教育者など英語の専門家に伝える活動も考えている。「英語落語には様々な会話の表現が出てきます。楽しく学べ、教育にも活用できるはずですよ。また、「落語やお笑いで世界を平和にしたい」という大きな夢もある。「私のモチベーションの根底にあるのはそれ。落語には凄いいパワーが込められていますから」。

●副専攻プログラムで音楽を学ぶ学生たち

専門の学び×芸術表現 〈歌う・弾く〉の相乗効果

「忙しくても充実。
欲ばりな“私の学び”」



2018年12月19日、「副専攻おんがくコンサート」が図書館新館1階iLibで行われた。これは、教職員、学生に副専攻プログラムのことをもっと知ってもらおうと、3人自身で企画したコンサート。
村上さん、松本さんのヴァイオリンの伴奏、川村さんのソプラノ歌唱で、クリスマスソングメドレー、映画「グレイテスト・ショーマン」からの曲などを披露した。併せて、「神戸女学院の100冊」書評コンテストで優秀賞を受賞した学生とのトークショーも行った。

女学院では所属する学科での主専攻とは別に、副専攻を1分野選択し、その分野の学科の学生と同じ条件で学ぶことができる。副専攻プログラム(リベラルアーツ&サイエンスプログラム[※])がある。多角的な視点と幅広い教養・技能を深められる、リベラルアーツ&サイエンスの考えに基づくプログラムだ。提供されているのは、19分野。今回は、音楽学部を副専攻として選び学んだ、総合文化学科の学生3名に話を聞いた。3人はいずれも2016年度入学。1年生で副専攻履修に必要な、説明会、実技試験、面接を経て、2年生から音楽学科の1つ下の学年の学生と一緒に学んできた。彼女たちは副専攻プログラムを活用し、自分なりの学びをどのように進めてきたのだろうか。

※2017年度新入生より新カリキュラムとなり、現在は「マイナープログラム」。



歌と総合文化の学びが つながる発見



●文学部 総合文化学科3年生
川村 さん (学年は取材当時)
副専攻は声楽分野

イラストレーティングを受講して準備を進めました。

授業を選ぶときには、空き時間をどこに作るかに苦心しました。音楽館の練習室で歌うには、人が少ない午前中に空き時間ができるようにしようと。レッスンまでに何回練習ができるかを計算して、必要な練習時間が確保できるよう、アルバイトの予定を連続して入れないなどの工夫をしたり、いつもスケジュールには頭を悩ませていました。

声楽を副専攻にすることで、音楽学部の友達も作ることができました。定期演奏会や先生の門下生による演奏会にも参加しました。代々、音楽学部の学生がお手伝いしている関西二期会、関西歌劇団や合唱団の記録撮影のスタッフもさせていただけることができて、ステージの裏側の仕事を体験し、プロのオペラを間近に観る機会に恵まれたのも大きな体験でした。昨年12月には、もっと教職員の方々や学生に、音楽を副専攻とする学びについて理解を深めてほしいと、私たち3人で企画してコンサートを行いました。

主専攻のゼミは、先生が「うたこえ運動」など、合唱の歴史研究をされていて、音楽にも造詣が深いことから選びました。ゼミ以外でも、たとえばジェンダー、心理学などの授業で、これは声楽でやったことと繋がると感じるものがありません。こういうことが、ものを多角的に向き合うリベラル

アーツ教育だなと感じます。

E n j o y m u s i c

好きを続けつつ 将来のための学びも



●文学部 総合文化学科3年生
松本 さん (学年は取材当時)
副専攻は器楽分野(ヴァイオリン)

ヴァイオリンは小学4年生から、家の近くの教室で17歳まで習っていました。高校までの部活は放送部に所属し、演奏したり、ものを造ったりする環境にいたので、大学でもそういう場所がほしかった、というのが副専攻で音楽を希望した理由の1つです。

副専攻の履修でいちばん苦戦したのが、時間の使い方でした。家が遠く、通学に2時間半もかかります。平日は



資格も、ヴァイオリンも 両方諦めない



●文学部 総合文化学科3年生
村上 さん (学年は取材当時)
副専攻は器楽分野(ヴァイオリン)

主専攻の授業があり、軽音部での活動もしていました。土日はアルバイトをしていました。初めの頃はレッスン前に十分な練習がなかなかできませんでした。練習不足で上達せず、先生にもご迷惑をかけてしまい、副専攻プログラムを履修した意味がないと反省しました。そこで少しでも毎日練習しようと、必ず大学にヴァイオリンを持って行き、空き時間ができたら、必ず練習室で練習していました。

現在は、精神保健福祉士を目指しています。音楽を学んだことで、音楽療法などにも関心を広げることができました。好きな音楽の授業を受け、主専攻とは異なる学びを得られたことで、総合文化学科の授業も楽しみなが毎日臨むことができました。

4年生では実習もあり、卒論や精神保健福祉士の国家試験もあります。副専攻修了後しばらくは、ヴァイオリンを弾く時間は限られてしまうと思いますが、卒業した後、市民オーケストラ等に入ってみたいという希望もあります。

実は1年生前期にあった副専攻履修のための説明会では、資格取得と副専攻の両立は難しいです、と言われたんです。それを聞いて実際に、資格を優先したいから副専攻は諦めたという人もいましたが、それは少しもったいないかもしれない、と私は思います。必ず履修し終えるという気持ちを持って、副専攻プログラムを履修する先輩たちが増えたらいいと思います。

私は大学の寮に住んでおり、寮生専用の音楽練習室が利用できました。練習環境には恵まれていたと思います。副専攻の履修だけでも大変だった上、料理や釣りのサークル、軽音サークルなどにも入っていました。また、声優のオーディションを受けたり、結婚式で演奏するアルバイトをしたり、とにかくいろいろなことに挑戦していたので、スケジュールはいつもいっぱいでした。

音楽学部で良い先生にご指導いただけて、演奏レベルもずいぶん上がったのではないかと思います。ただ、座学がかなり難しく、特に苦労したのが、和声学でした。楽典を読んでも理解できず、電話で母に助けを求め、なんとか単位をとることができました。副専攻を履修したことで、将来の選択の幅が広がった気がします。楽器関連など演奏技術を活かせる職業選択もありかな、と思えるようになりました。ゆくゆくは近所の子供たちに自宅でヴァイオリンを教えたいと考えています。



VLADIMIR MALAKHOV AND THE STARS OF THE WORLD BALLET



KSENIA ORLOVA PHOTOGRAPHY



●音楽学科舞踊専攻卒業生によるウクライナ公演 日本を飛び出し、世界へ

VLADIMIR MALAKHOV AND THE STARS OF THE WORLD BALLET
—マラーホフと世界のスターたち—



- 音楽学部 音楽学科 舞踊専攻
島崎 徹 教授
- 音楽学部 音楽学科 舞踊専攻 1期生
本間 紗世 さん
- 音楽学部 音楽学科 舞踊専攻 6期生
服部 千尋 さん

2018年11月22日にウクライナ・オデッサ国立劇場、24日に同・キエフ国立歌劇場において『VLADIMIR MALAKHOV AND THE STARS OF THE WORD BALLET』が開催され、特別ゲストとして神戸女学院大学音楽学部音楽学科舞踊専攻の島崎徹セレクトメンバー「Dance Barbizon」が出演した。この公演は、100年に1人のスターと称され、世界中で活躍するバレエダンサーであり振付家のウラジミール・マラーホフ氏主催の祝賀祭。世界各地からトップクラスのダンサー達が集結し、ネオクラシックからコンテンポラリーまで、オリジナリティー溢れる作品の数々を披露した。島崎教授と、卒業生であり非常勤講師の本間紗世さん、服部千尋さんに、海外公演の手応えや感動を聞いた。



ウクライナ公演参加のきっかけは？
島崎教授 もともと僕は、マラーホフ氏が率いたベルリン国立バレエ団のダンサーであっ



本間 紗世 さん

た本学客員教授の針山愛美氏と交流がありました。彼女から僕のことを聞いたマラーホフ氏が、「昨年7月に来日。僕が芸術監督を務めたNHK大阪ホールでの公演『Dance at the Gathering 2017』で、僕の振付作品を踊りました。またまたその時に上演したのが島崎徹セレクトメンバーによるコンテンポラリー作品。彼女達の踊りに感動したマラーホフ氏が「ウクライナの人にも観てほしいから、特別ゲストとして来て欲しい」と招待してくれたのです。

「Dance Barbizon」のメンバー12人はどのように選出されたのでしょうか？
島崎 基本的には僕と本間さん、服部さんの3人で決めました。二人は舞踊専攻の非常勤講師であり、チーム島崎の現役ダンサー。僕と同様に卒業生の動向等も把握しており、今回のような依頼が来ると、いつも相談するんですよ。

お二人は海外公演の話を聞いた時、いかがでしたか？
本間さん 「やってやる」という気持ちになりました。「Dance Barbizon」は卒業生を中心に構成されたチーム。メンバー全員が島崎先生の目指すレベルを把握していて、そこへ到達するためなら時間も労力も惜しみません。学生との違いははつきり出して、私達だからこそ出来る舞台にしたいと思いました。

服部さん 演目の一つ「For James」は、私の代が卒業公演で踊った作品。今回は、同期生ではなく選抜メンバーと共に踊るので、「より高いレベルを目指すことが出来る」と楽しめました。

うとしたらよろけそうに。リハーサルも日本では前日に行いますが、今回は当日、しかも本番直前だったのでハラハラしました。

服部 短時間でなんとか調整しました。

島崎 ヨーロッパの古い劇場ではまああること。観劇しやすいよう傾斜をつけているんですよ。

本間 出番の後、舞台袖からトップダンサー達の踊りを観ることが出来たのも、凄く刺激的でした。

服部 ダンサー達の身体つきや持っているものが全然違った。向こうでレッスンを受けたことも財産ですね。あと、私は劇場の美しさ、重厚さが印象的でした。特にリハーサル中、ステージから観た光景は素晴らしいかったです。

本間 街なかも日本のような華やかなショッピングモール等はなく、仄暗く、バレエのポスターが至る所に飾られていました。自然とバレエを観たくなる、本場ならではの空気を感しました。

今回に限らず、お二人が島崎先生から学んだことは？
本間 「責任」という言葉が様々な場面で浮かびます。1年生の時に舞踊専攻の登竜門『Here We Are!』を踊ったのですが、その際に先生が「僕たちは何千回も練習するけれど、観客にとっては1回だけなんだよね」と仰ったんです。その1回に対する表現者としての責任。また、今は指導者としての責任も感じています。私は関西の男性ダンサー集団「Professional Dancer's Association」でも島崎先生の振付けで指導しています。先生のいい現場で、先生が求めている舞台を組み立てていく。「本物はここまでやり切るんだ」という姿勢を間近で見せてもらっているの、私もやり切るほかに、常に限界のレベルが引き上げられています。

服部 机上の学びではなく、生きていく上で必要な学び。生きる姿勢を教わり続けています。

今後の展望は？
島崎 今回のウクライナ公演には世界最高峰と言われるパリ・オペラ座バレエ団のトップダンサー二人が出演していました。公演後、彼らが「徹、僕達は一緒に何かしたい」といいます。僕達は「Les Indes de l'Opera de Paris」というグループを持っている」と声をかけてきました。帰国後、ダンス総合メーカーのChacottさんにその話をしたら、「それは今、世界中がどうしたらコンタクトを取れるのかと必死になって探しているグループですよ！ぜひ一緒に企画させてください」と。その二人のうち一人が、アメリカ等で大ブレイクしているグループのディレクターでもあったのです(笑)。

すぐに連絡を取って話が決まり、4月24日から4日間、彼ら二人がパリからやって来て僕の振付けを習得し、8月には僕がパリへ飛んでリハーサル。同月19日にダンサー全員を連れて日本に戻り、「Dance Barbizon」と共に23日に金沢、26日に東京、27日に名古屋、30日に大阪で公演します。一流の人達が、僕達をプロモートしてくれて。本当にありがたいです。

本間 チャンスに恵まれ、感謝しています。この機会を大事にして、私達も頑張るのみです。

服部 8月の公演でも「Dance Barbizon」の雑草魂、観せますよー(笑)



服部 千尋 さん

学生主催の文学部講演会を開催



11月17日(土)に、文学部講演会を開催しました。本講演会は、文学部の学生が主催者となり企画運営のすべてを行うもので、今年度は総合文化学科2年生と英文文学科3年生の学生が翻訳家の柴田元幸氏(東京大学名誉教授)を講師とする企画を申請。そこに通訳・翻訳プログラムを履修している環境・バイオサイエンス学科2年生の学生も加わり、前期から準備を重ねてきました。

講演会の前半は、登壇した学生3名から柴田先生に質問を投げかけ、先生からは、翻訳書『ハックルベリー・フィンの冒けん』でのハックやジムの話し言葉の訳し分けの難しさ、「通訳・翻訳を学ぶ学生が力をつけるにはたくさん本を読むこと

が大切」など、示唆に富むお話をうかがいました。後半は、柴田先生の訳で2016年に出版されたブライアン・エヴァンソンの『ウインドアイ』の先生による朗読から始まりました。物語の中に入って、登場人物になってしまったような先生の朗読に、参加者も引き込まれました。

続いて、本学名誉教授の内田樹先生が登壇し、柴田先生と対談され、お二人の軽妙なやりとり、何度も笑いが起こっていました。神戸女学院大学のタグライン「私はまだ、私を知らない」に関しての学生の質問にも、「本当の自分」はどこにもないということを理解したうえで、より自分を知らうとして自分を開いておくことに意味がある、とメッセージをいただきました。

ダンサーとしての参加はもちろん、メンバーの指導も担い、プレッシャーも大きかったのでは？
服部 そうですね。チーム全体をある程度のレベルにまで持っていかなければ、任された意味がありませんから。不安もありましたが、先生が求めているレベルに到達できるよう、完璧を目指しました。

本間 30秒のシーンを作るために3時間も4時間もかけて試行錯誤している先生の姿を近くで見ているので、私達が簡単に流すことはできません。もう……皆をしごきたくないですよ(笑)。

島崎 二人が嫌われ役を引き受けてくれたので、僕はやるべきことに専念できたと言える(笑)。自信の無いことを人に教える行為は大きなストレスを伴いますが、二人は僕の振付けを完璧に理解している。肉体的にはハードでも、そういう意味でのストレスは無かったはずですよ。

当日の反響はいかがでしたか？
島崎 スタンディングオベーションの嵐ですよ！僕達が日本の大学から来たことは観客には全然関係ない。ワールドバレエスターに招待された特別ゲストとして称賛された。世界的な舞台で認められ「これまでコツコツと培ってきたことは間違っていない」と証明されたように思いました。

また、終演後にはキエフ国立バレエ学校から「ぜひうちの学校でも公演してくれないか」とオファーをいただき、早速実現しました。こちらも学生達が総立ち！先生方も「うちの学生がこんなに興奮したのを観たことがない」と驚いていました。

世界の舞台で成功を収めたのですね。ほかに印象に残っていることは？
本間 斜めの舞台！(笑)日本の舞台と違ってう度位の傾斜があったので、回って止まろ

●高岡ゼミと株式会社米寿の産学協同研究

国産茶葉「べにふうき」を使った
オリジナル和紅茶を開発

昨年9月、人間科学部 環境・バイオサイエンス学科の高岡素子ゼミの学生12人と西宮市の発酵食品販売会社「株式会社米寿」が協同し、鹿児島県産の茶葉「べにふうき」を用いたオリジナル和紅茶を開発した。タイプはストレートティー「気品あふれる べにふうき」とフレーバーティー「魅惑のいちごを添えて」の2種類。茶葉には、1995年に品種登録された日本初の紅茶・半発酵茶兼用品種「べにふうき」を使用しており、香りが高く、ほんのりとした甘みが特徴だ。

10月26日～11月1日には、大阪梅田「LUCUA1100」の「キッチン＆マーケット」にて試飲販売を実施。現在は、キャンパス内の「セブンイレブン」と「ピゴの店」、阪急門戸厄神駅前の「スプーンカフェ」、LUCUA1100の紅茶売り場にて取り扱われ、順調な売れ行きを見せている。開発の指揮を執った高岡先生、成分研究を担当した中野さん、広報宣伝を担当した稲垣さん、齋藤さんに話を聞いた。

「気品あふれる べにふうき」—756円(税込):7つ入り
「魅惑のいちごを添えて」—680円(税込):8つ入り
ティーパックをいれたままでも渋くならず、冷蔵庫に18時間置いて水出しすると特に香りと甘さが引き立つ。



●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科
高岡 素子 教授——TAKAOKA Motoko

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科4年生

中野 さん——A.NAKANO

稲垣 さん——NINAGAKI

齋藤 さん——M.SAITO

(学年は取材当時)

●担当教員に聞く

高岡 素子 教授——TAKAOKA Motoko

▼自分たちで検証したエビデンスを
付けた商品を世の中に発信する

この度の商品開発は、米寿さんから「とても美味しい日本産の紅茶がある」と情報をいただいたことがきっかけです。私はオーガニックティーの研究もしていますが、日本産の紅茶があることは知らなかったので興味を持ったのと、教えていただいた紅茶の産地、鹿児島県の茶業試験場に知人がいたこともあり、試飲へ伺いました。本当にすごく美味しくて。今まで飲んだ紅茶とは違う、奥に緑茶のような深みが感じられる味でした。

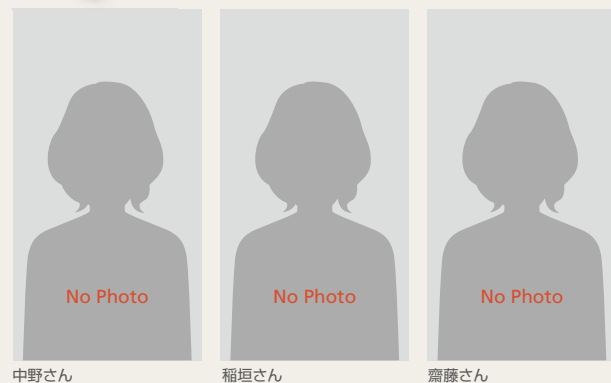
「べにふうき」は、1887年頃にインドより導入した種子から選抜された「べにほまれ」を母親に、1954年農林省を通して鹿児島県に寄贈した種子から育成された「枕C d 86」を父親

に持ち、日本で育種された品種です。現在、知覧町で栽培されていますが、生産者が限られているため量産できず、多くの人に知ってもらいたいけれどその手段もないとのこと。また、和紅茶は、幕末に薩摩藩士の五代友厚が起業家の視点から、大久保利通が産業として注目し、作製されており、1971年の紅茶輸入自由化以降は地場消費にごく少量だけ生産されているという歴史も見えてきました。日本では緑茶の機能性があり、紅茶の機能性については少ないです。そこで、自ら検証した紅茶の機能性を広めることを目的とし、研究を開始しました。

開発にあたっては、最初は「べにふうき」のみに絞らず、何種類かの国産茶葉を紅茶にし、甘みや色、香りなどを点検して判定する官能検査を実施しました。同様に、フレーバーも宮崎産と佐賀産のいちごのほか、じゃばら、温州みかん、日向夏などを何度も飲み比べ、抗酸化性も測定しながら判定しました。

今回、学生は「科学的な実験を行い、機能性等のエビデンスを得て、商品化する」という一連の流れを学びました。怪しい情報も多い中、正しい情報を見分ける力を養えたこと。商品を作り販売する大変さを知ったこと。そして、産業界の様々な人と関わり、力を借りる機会を持てたことは、とても貴重な経験であり、今後の人生にも役立つはずです。

●和紅茶 開発エピソード



中野さん

稲垣さん

齋藤さん

—大変な実験ですね。

中野 300回のうち、半分は失敗でした……(笑)。紅茶は保存が利かないため、毎回抽出から始まります。実験しやすいよう時間を逆算し、なるべく無理のないスケジュールを立てて行ないました。

—パッケージのデザインも自分で考えたそうですね。

齋藤 全員1点ずつデザイン案を提出し、女学院にいる猫を描いたイラストに決定しました。でも、ボツになってしまったので、別案を考え、女学院らしさを出すために校章やヴォーリズ建築風のダイヤ模様を入れました。いちごや葉っぱの微妙な色にもこだわったんですよ。

稲垣 ポツになってから次の案を出すまでに時間がかかりました。でも、パッケージは使いやすさを優先し、5種類の中からすぐに決まりました。

—販売の手応えはいかがでしたか？

中野 他大学の友達がわざわざスプーンカフェまで買いに来てくれて、美味しかったと言ってもらえたのが嬉しかったです。

稲垣 友達が家に遊びに来たときに振る舞ったら、「美味しいね。どこで売ってるの?」と聞かれ、ゼミで作ったと言ったらビックリされました。あと、私はルックアで試飲販売も行なったのですが、積極的に「私達が作りました」とアピールしたら、たくさんのお客様が試飲して買ってくださり、嬉しかったです。

—今回の経験から、得たことは？

中野 抽出方法など試行錯誤の連続で、失敗する度に衝撃も大きくて。一人でやっていたら落ち込んでしまうことも、研究班のメンバーで支え合っていたから出来ました。その絆が得たことですね。

稲垣 研究者はこんなに商品への思い入れを持ち、こんなに大変な過程を経て作っているんだということを実感。猫のイラストのことで衛生面からの目線も知ることができ、勉強になりました。

齋藤 商品化するには安全性などの信

—今後の抱負をお聞かせください。

中野 日常でもこの食べ物にはどんな成分が含まれているのだろう?と考えるようになりました。今後もそういう目線を持ち、家庭の食生活も豊かに出来ればと思います。

稲垣 私は卒業したらメーカーに就職し、販売する立場になります。今回の経験を生かし、お客様に商品のよさをしっかりと伝えられるようになりたいです。

齋藤 私は化粧品メーカーの営業をします。今回の抗酸化性のように、この製品にはこんな機能があり、こういうメカニズムによってこうなるんだとわかりやすく魅力的に伝えていきたいです。

▼大阪梅田「LUCUA1100」の「キッチン＆マーケット」での試飲販売



●NHK「あさイチ」(クイズとくもり)「ちょっとホットな防寒術」に高岡ゼミの研究が紹介されました

「体を温める飲み物No.1は!?」の質問に答える形で、答えは……1位 おしるこ、2位 ホットレモン、3位 微糖コーヒー、4位 紅茶、5位 緑茶。独自の実験を敢行。5種類のホットドリンクについて、飲んだ後に体の6カ所の表面温度を測り、その平均値からNo.1を導き出しました。(※製品による成分の違いや、個人差によって結果に違いが出る場合があります)



講演会・公開講座・コンサートなど

音楽学部講演会・公演

●ベガにオーケストラがやってきた! Vol.9(サマーコンサート)
日 時: 6月25日(火)18:30開演
場 所: 宝塚ベガ・ホール
入場料: 前売り500円 当日600円

●オータムコンサート
日 時: 10月10日(木)18:30開演予定
場 所: 兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール
入場料: 無料

●音の響宴
日 時: 11月5日(火)18:30開演予定
場 所: 宝塚ベガ・ホール
入場料: 1,000円

●定期演奏会
日 時: 11月26日(火)18:30開演予定
場 所: 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール
入場料: 1,000円

問い合わせ: 音楽学部事務局 TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551 E-mail: music@mail.kobe-c.ac.jp

アウトリーチ・センターイベント

●第53回 子どものための七夕コンサート 星空の音色～天の川の旅～
日 時: 7月6日(土)

第1部 11:00～12:00(10:15開場) 年齢制限なし
第2部 15:00～16:00(14:30開場) 幼稚園年長以上対象

場 所: 神戸女学院講堂
出 演: 「音楽によるアウトリーチ」履修生4年
入場料: 大人500円、子ども(19歳以下)300円 申込み要

●第10回 音で遊ぼう! 子どものための音楽作りワークショップ
日 時: 9月21日(土)9:30～16:00

場 所: 神戸女学院大学音楽館ホール
講 師: 英国ロンドン市立ギルドホール音楽院リーダーシップ専攻修了生
参加費用: 無料 申込み要(対象: 小学生・中学生・高校生 先着40名)
※詳しくはアウトリーチセンターのホームページをご覧ください

問い合わせ: 音楽学部アウトリーチ・センター TEL 0798-51-8584
FAX 0798-51-8551 E-mail: concertfch@mail.kobe-c.ac.jp

心理相談室ウィーク

●無料相談(要予約)
日 時: 7月29日(月)～8月2日(金)10:00～17:00(土日除く)
場 所: 神戸女学院大学心理相談室
申込み期間: 7月1日(月)～7月12日(金)10:00～18:00(土日除く)
※在学中の方及びその保護者の方のお申し込みは受け付けることができませんのでご了承ください。

●講演会(予約不要)
演 題: 関係を良くするための心の持ちよう～愛着とメンタライジングの観点から～
日 時: 7月31日(水)13:00～15:00
場 所: 神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館2階201室
講 師: 石谷 真一(神戸女学院大学人間科学部教授)
問い合わせ: 神戸女学院大学大学院心理相談室 TEL 0798-51-8554

カウンセリングルーム講演会

●カウンセリングルーム主催 春の特別講義
「生きづらい時代と自己肯定感～自分が自分であって大丈夫～」
講 師: 高垣 忠一郎氏(立命館大学名誉教授)
日 時: 6月14日(金)14:00～15:30
場 所: メアリー・アンナ・ホルブルック 301教室
参加費用: 無料 申込み要
問い合わせ: カウンセリングルーム TEL 0798-51-8541

金曜日公開プログラム

●オルガンコンサート
日 時: 6月28日(金)10:35～11:25
場 所: 神戸女学院講堂
出 演: 片桐 聖子(学院オルガニスト)、前田 直子(学院オルガニスト)

●宗教活動委員会主催講演会
細胞から生命が見える～健康な肌のターンオーバーを例に～
日 時: 7月5日(金)10:35～11:25
場 所: 神戸女学院講堂
講 師: 西田 昌司(環境・バイオサイエンス学科 教授)

●礼拝
日 時: 7月26日(金)10:35～11:25
場 所: 神戸女学院ソールチャペル
説 教: 大澤 香(チャブレン)

●後期始業礼拝
日 時: 9月27日(金)10:35～11:25
場 所: 神戸女学院ソールチャペル
説 教: 中野 敬一(学院チャブレン)

●卒業生によるコンサート
日 時: 10月4日(金)10:35～11:25
場 所: 神戸女学院講堂
主 催: 音楽学部

問い合わせ: チャブレン室 TEL 0798-51-8502

高校生等参加イベント

●オープンキャンパス
日 時: 6月16日(日)／7月28日(日)／8月3日(土)／8月4日(日)
9月16日(月・祝)10:00～15:00
内 容: 模擬講義、キャンパスツアー、各種相談コーナー 他
問い合わせ: 入学センター TEL 0798-51-8543

●第10回絵本翻訳コンクール
高校エントリー締切: 7月19日(金)
※エントリー受付後、課題図書をお送りします。
詳しくは本学ホームページをご覧ください。
問い合わせ: 学長室(広報) TEL 0798-51-8585

●音楽学部夏期講習会(要申込み、詳細は音楽学部ホームページをご覧ください)
日 時: [音楽] 7月27日(土)～7月30日(火)
※受講資格: 中学生・高校生
[舞踊] 7月27日(土)、7月28日(日)
※受講資格: 中学3年生以上、高校3年生優先30名まで。

場 所: 神戸女学院大学音楽館
参加費用: 無料

●音楽学部冬期講習会(要申込み、詳細は音楽学部ホームページをご覧ください)
日 時: [音楽] 12月15日(日)開催予定
場 所: 神戸女学院大学音楽館
参加費用: 無料
問い合わせ: 音楽学部事務局 TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551 E-mail: music@mail.kobe-c.ac.jp

●サイエンス体験
日 時: 第1回 8月3日(土)／第2回 8月4日(日)
場 所: メアリー・アンナ・ホルブルック記念館
参加費用: 無料 申込み要
(対象: 高校生・予備校生等の女子、保護者、教員)

●ラボ見学ツアー～理学館体験～
日 時: 7月28日(日)／9月16日(月・祝)
場 所: 理学館 S-24教室またはエミリー・ブラウン館
参加費用: 無料 申込み不要
(対象: 高校生・予備校生等の女子、保護者、教員)

問い合わせ: 人間科学部事務局 TEL 0798-51-8553
FAX 0798-51-8560 E-mail: jin-jim@mail.kobe-c.ac.jp

めぐみ会主催行事

●2019 めぐみ講演会
「人身取引と現代の奴隷制～私たちに関係ない…とは言えない4つの理由～」
日 時: 7月19日(金)13:30～15:00
講 師: ノット・フォー・セール・ジャパン(NFSJ)代表 山岡 万里子氏
場 所: 神戸女学院めぐみ会館
受講料: 1,000円(学生無料) ※要予約(Webからも可)

「東洋文化と西洋文化が出会う舞台 伽羅沙～ガラシャ～」
日 時: 10月12日(土)13:30～15:00
講 師: 能楽シテ方観世流 重要無形文化財各個認定保持者
梅若 実玄祥氏

【特別出演】
ソプラノ～神戸女学院大学学長・音楽学部教授 斎藤 言子
パイプオルガン～神戸女学院オルガニスト 片桐 聖子
会 場: 神戸女学院講堂
受講料: 【一般】1,500円／【学生】1,000円 ※要予約(Webからも可)

●2019アートセミナー
イタリア、珠玉の壁画芸術(全2回)
第1回: 6月17日(月)／第2回: 7月1日(月)10:30～12:00
講 師: 大阪大学文学研究科教授、神戸女学院大学文学部非常勤講師
岡田 裕成氏

会 場: 神戸女学院めぐみ会館
受講料: 各回1,000円(学生無料) ※要予約(Webからも可)

古典倶楽部～テーマに沿って高校の教科書を読み直す～
関白兼家とその子孫たち(全3回)
第1回: 9月27日(金)／第2回: 11月1日(金)／第3回: 11月29日(金)
13:30～15:00

講 師: 元神戸女学院中高部非常勤講師 錦田 靖子氏
会 場: 神戸女学院めぐみ会館
受講料: 各回1,000円(学生無料) ※要予約(Webからも可)

問い合わせ・申込み: 公益社団法人神戸女学院めぐみ会
TEL 0798-51-3545 URL: https://megumikai.or.jp/

●「Vistas」アンケートのお願い●

神戸女学院大学広報誌「Vistas」をご覧いただきありがとうございました。
P.17～18にアンケートハガキがございますので、皆様からのご意見・ご要望等をお寄せください。

—※行事について特に記述のないものは、基本的に申し込み不要・無料です。—